

育てられつつある時代に「育てる」とを学ぶ(7)

— 乳幼児教育における「保育教育」 —

金田 利子

岡村由紀子

はじめに

今回で、この連載を閉じることになります。終わりに当って、(1)で詳しく触れた、国民の普通教育としての「保育教育」とは何かについて振り返っておきます。

「保育教育」とは世代再生産の教育であり、将来親になってもならなくてもすべての子どもに、次世代、ひいては異世代と発展的にかかわろうとする意欲と基礎的な力を育てる教育のことをさします。この力は、自

分以外の他者とかかわる力に集約されますが、他者を理解することは自己を知ることと不可分にかかわることを考えますとき、その力の基礎として、自己信頼感の育成もまた不可欠になります。したがって、「保育教育」で育てたい力の基礎はかわる主体としての自分づくりの教育ともいえます。

今日の家庭科においては、中学校と高等学校にのみ、保育教育が位置づけられています。小学校にも、乳幼児期においても、この教育は必要になるはず

です。高等学校にも中学校にもさまざまな教育課程があり、その中の、自分づくりはそうした学習に取り組み中核になります。もちろんそれだけを学んでいればよいわけではありません。そのように捉えるなら、小学校においても乳幼児教育においても、いや乳児教育においても、その関係（諸内容と自分づくりの関係）は同じはずではないでしょうか。

先回はこのような角度から、小学校における保育教育の実践を取り上げました。今回は乳幼児教育においてはどのようなことが「保育教育」に当たるのかについて扱いたいと思います。ここでは、とくに乳幼児教育のなかでも幼児期の教育における「保育教育」について、こうした内容を意識的に取り組んでこられた岡村由紀子氏（あおぞらキンダーガーデン園長）に登場していただきました。（以下は岡村氏の執筆による）。

幼児期の子どもと保育教育

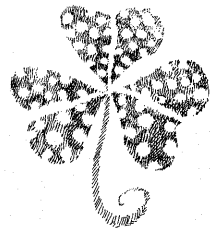
幼児期の子どもたちが「育てられている時代」に育て

ることを学ぶ」ということを考えると、一見イメージしにくいのですが、保育教育の本質を本連載(1)（昨年七月号）の言葉（……自己

信頼感を築き、児童観、発達観、人間観、を乳幼児とかわりつつ自己の育ちを対象化する中で、命の重みを実感を持つて学ぶなら、子ども時代を豊かにするとともに、育てる側になったときの大きな力になるのではないのでしょうか）から捉えるとき、私たちの園で営まれている保育の中で大事にしているものと通じるように思い報告させていただきます。

幼児期は感性の時代であると言われ、他の教育の時期とはちがっています。

“みんなちがってもいいんだよ”ということを感じる生活を作っていくには、子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人、それぞれが自分らしく生きていく関係を抜きにはできない時代です。



幼児教育はなんとと言ってもあそびが中心になります
が、幼児期の「保育教育」においても、その力の基礎
は子どもの生活の中心であるあそびの中で育つのでは
ないかと考えています。

自分が丸ごと受け止められ、夢中になってワクワク
ドキドキ遊ぶ中でこそ、子どもは「自分をたいせつに
する」、つまり「自分らしさ」が育つていくのだと思
います。

子どもがあそびの中で主人公になって夢中になつて
いるときは、自信にあふれ、ほんとうにすてきな顔を
見せてくれます。(それはもちろん、一見マイナスと
思われる、悔しい、悲しい、こわい、さみしい感情な
ども含めてです)そして、あそびつて一人で遊ぶの
も楽しいけれど、友だちと遊ぶのもっと楽しいとい
う感情を、たっぷり育てたいと願っています。それ
は、子どもたちが大好きな友だちの中でこそ、人間と
して大切な自分らしく生きていく力(自立的自己コン
トロール)も育つていくと思うからです。幼児期の保

育の中で育つ、友だち大好き(大きくいえば、人間大
好き)の心を、ていねいに豊かに育んでいくこと、そ
れこそが幼児期の「保育教育」に当たると考えます。

あそびなかまの中で育つ自分を大切にする力

—四歳児の実践から—

今日は、まなみちゃんの誕生日です。まなみちゃん
が「家にきてほしい」というので、みんなでまなみ
ちゃんの家にてかけました。まなみちゃんの家で少
し遊んだ後、まなみちゃんがパーティーは「草スキーし
て遊びたい」といつていたことを伝えて、まなみちや
んの家の裏にある蘆科川の土手で草スキーをすることに
しました。おじいちゃんがダンボールを用意してく
れました(ありがとう)。お昼近かつたけど、さつそ
く思い思いにすべるみんな。そんな中、なんとなくげ
んきがないまゆこちゃんです。ダンボールの上に座つ
て見ているのです。

そのうち、「おなががすいたー」の聲が広がったの

で、土手の下の陽だまりでお昼を取るようにしました。シートを敷いていると、けんご君、ひさし君がやってきて「まゆちゃん、なにかおかしい。どうした? っていつても、何にもいわない」というのです。

そこで土手の上のまゆこちゃんのところへ行くと、ほんとうに元気がなくなつて、ひざを抱え込んで伏せているのです。「どうしたの?」といつても、何を聞いても返事がありません。そこで「じゃあ、お話できるよになつたら言つてね。みんな、おなかすいたというから、先に食べていいかしら?」というと、うなずくまゆこちゃん。土手の下に下りていき、お昼の支度をしているみんなにそのことを伝えて、さきに「いただきます」をしました。

その後保育者は「お話できるようになつたか聞いてくるね」といつてまゆこちゃんのところへ行き、「もう、お話できる?」と聞くと、かすかにうなずくまゆこちゃん、ひとこと、「一人で食べたい」というのです。保育者が「そうかなあ。じゃあ、ここじゃあ下か

ら見えなくなつて心配だから、もう少しこつちに来て、見えるところで食べてくれる?」という「うん」とうなずくまゆこちゃん。そこでいつしよにシートを敷くのを手伝いながら聞いてみました。

保育者「ねえ、きいてもいいかなあ、ひとつだけ」

まゆこ「うん」

保育者「まゆこちゃんさあ、ダンボールですべる

のこわい?」

まゆこ「うん」

保育者「そうだったんだ。じゃあ、お昼食べたら

抱っこでやる?」

まゆこ「ううん」

保育者「じゃあ、おんぶはどう? こわくない

し、いいよ」

まゆこ「うん、そうする」

(やつと笑顔に)

そこでもう一回

「みんなのところで食べる？」と聞くと「ここでいい」というので、土手の上で「いただきます」をしたまゆこちゃんでした。下に行つて、今話していたことをみんなに伝えました。

けんご「いっしょに、すべるよ！」

だいし「聞いてみる、食べたなら」

あきら君はさつそく靴をはいてまゆこちゃんのところへ。

あきら「いっしょにすべるって！ 肩につかまれ

ば大丈夫だからって。だから（あきら）

いっしょにすべる！」

しんたろう「オレ、まゆこちゃんこわいと言つて

るからいっしょにやるよ」

そして、お昼を食べ終わると、まだ食べている保育者を置いて、まゆこちゃんは、あきら君や、けんご君、しんたろう君の背中にくつついてかわるがわるすべり（まゆこちゃんのとりにこでした）、とつてもいい顔でやっています。その後は、ずつとるんちゃん

と二人すべりを楽しみました。今では「草スキー、楽しい！」というまゆこちゃんになりました。

一般的には、四歳児は他者が見えはじめ、自己に気づく時代であり（第二の自我の形成期）その心の現われは多様です。すねる、臆病になる、自信がなくなる、今までできたことができなくなるなど、生活やあそびの中で一見わがままとも思える行動が多くなり、家の方々は“なまいきになった”“言うことをきかなくなつた”など子育ても子どもの心が見えにくく悩むことが多くなつてくるようです。

こうした、わがままにも似た子ども現われを自己主張として捉え直して保育を進めていくと子どもは、自己を見つめ、仲間の存在に気づき、あそびが楽しくなり自信になっていきます。

こうしたあそびのなかまの中で育つていった子どもたちは、五歳児になると自己の意見を“考えがある”“わたしはこう思う”“いわないとわかんない”“○○ちゃんと同じというのだからいいんだよ”“イヤだけ

じゃあわかんないから訳をいってほしい”など合意をつくる活発な話し合いが見られるようになっていきます(著者らの共著『4歳児の自我形成と保育』ひとなる書房 二〇〇二年 参照)。

相棒活動と保育教育

「あおぞら」では入園すると相棒といつて異年齢(二〜五歳)でグループをつくります(核家族化が進む中で同じ園に集まる大きなきょうだいとして自然に交流することを大切にしています)。

グループづくりは、顔見知り、地域や兄弟関係などを大切にします。“あの子の相棒になりたい”とはじめから楽しみにする年長児もいます(卒園するまで同じグループ)。

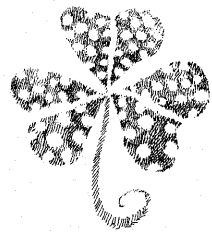
着替えの手伝いや、週一回一緒に食事をし、困ったときのおにいさん、おねえさん役でおしっこに連れていったり、散歩に連れていったり様々です。

相棒と一緒にいたい! と入園した子が五歳児と散

歩にいたり、食事も一緒にする姿も見うけられます。この活動は入園した子どもたちが園に居場所を作っていくプロセスでは大きな力となっているようです。

父母からのおたよりでも、“相棒さんの名前がよくできます”“だいすき、といっています”などよく聞かれます。また、大きい子どもたちも小さい子が泣く姿を見て“おうちへかえりたいんだね”“もうすぐだよ”と声をかけあそびに誘ったりルールのわからない姿を見て“にじさん(三歳児)はお口で言えない(言葉でなくすぐたいてしまう)けどしようがないなあ”という四、五歳児。自分たちならもう言えるという喜びとそれを自覚する子どもたちの姿が見られます。

小さくつても自分を大切にしながらも、違った発達の子どもたちとかかわる中で自分を育てている姿は多



く見られて卒園をむかえる頃は、大きい子にაცოგაれる姿、小さい子を優しく思う姿がいろいろなところで見られるようになっていきます。

これは、まさしく幼児期において広い意味では異世代につながる、異年齢、異発達の子どもとかかわる力を大きい子にも小さい子にもはぐくむ活動に当ります。

子育ての中で自分が育つ大人たち

保育の様子を日常おたよりにして伝えていきます。

それは、ありのままの子どもの姿であり、その中で子どもを知ってもらい「子どもは凄い」「子育てって楽しいなあ」と感じ、子育てを応援していきたいと願っているからです。

以下は卒園を前にいただいたおたよりの抜粋ですが、いつだって、どんな時だって大人も子どもも育ちあえることの素晴らしさ、そして児童虐待などが増える中での連鎖が絶ち切れる何かの力になればと益々、

園自体が親と共に「育てている時代に育つことを学ぶ」役割も大きいのでは、と思っています。

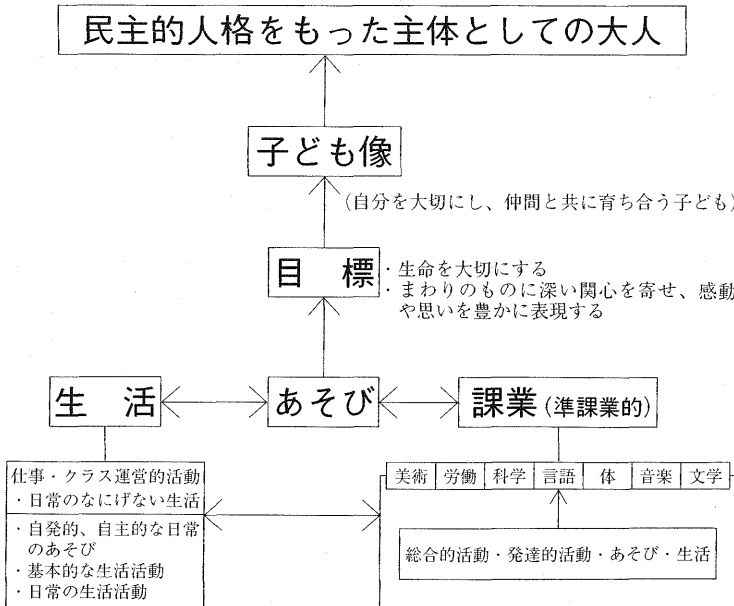
* 今の世の中不安がいっぱいですが、子どもを通してまだまだ人生すてたもんじゃあない、と希望をもっています。

* なるべく問題を起こさないようにとか、自分の弱さ、かつこ悪いとこ出さないようにと初期の頃の連絡帳はあまりさしさわりのないこと書いていたような気がします。ーからかな？ 岡村先生だから甘えてしまいかけて「信頼する」ことを学び、信頼できる人々に出あえたことに感謝しています。子どもたちそれぞれの三年間も、とつても素敵だったけれど私も、とても貴重な六年間を過ごさせてもらいました。

* 私（元保育者）も、先生たち一人一人、みんな人間がステキなんだなと思っています。やっぱり意地悪な人は、いくら仕事だからといっても保育中もう一人の

自分を出し、本当の自分をかくしても絶対人間性は出てしまいます。でも「あおぞら」は、もう一人のウソの自分を出す必要もなく、先生たちもありのままの姿で保育してくれて、それがまたステキなので子どもたち、親たちがつい輝きたくなってしまっただなっと思っていました。

* 「あおぞら」と出会えたこと、岡村先生に出会えたこと、そして子どもを生めたこと（子どもができない頃、三年半でしたが新婚でいちばん辛い時期でもありました）、いい出会いのおかげで私の生活も楽しくて仕方ない毎日。おかあさんたちも本当にいい人たちばかりで子どもを生めたおかげでかけがえない友人がいっぱいできました。「あおぞら」に入っていることばかりでした。私もこの五年でずいぶん成長したと思います。いろんなこと勉強できましたし、吸収できました。



▲図1 あおぞらの保育 『4歳児の自我形成と保育』 p.32

親の私もとっても充実していました。

まとめにかえて

幼児期の活動は、いろいろな要素が含まれていて、一つの側面で見えていくのはとても難しいと思っと思っています。こんな子どもになってほしい（子ども像）と願うことが、日常のあそびや生活の中で具体的に結びつくことでこそ、初めて、保育が見えてくるように思いますが、自分らしさとは、自分が好きになる心（自己肯定感）、自分に自信がもてる心だと思のです。それは園に来るのが楽しくって、友だち大好きの人に支えられて、どんな自分も出せることなくしては生まれないことだと思います。ふざける姿も、甘える姿も、元気がない姿も、一見大人が「困ったなあ」と思えるような姿も、みんな、みんなそこが安心できるからこそ姿だと思のです。そんな心子どもたち同士が共感しあって、あそびや生活する中で、わかる力、できる力、感じる力も育ち、人間らしく生きる力の感性的土

台が育つのではないかと思います。

そして先に見たように、子どもたちのこうした姿に接する中で、大人たちもまた、「育てている時代に育つことを学び」、新たな自分づくりの中で人間として大きく発達していきます。（以上岡村）

おわりに

岡村さんの実践から、右ページの図のように、幼児教育の中にも、さまざまな保育内容の中を貫く異世代と発展的にかかわる力の育成につながる自分づくりの基礎となる教育（＝保育教育）が位置づいていることがわかります。

金田（静岡大学）

岡村（あおぞらキンダーガーデン）